NEWS LETTER
第 **10** 号　2007/09/15

発行所　英国王立写真協会・日本支部
〒107-0051
東京都港区元赤坂 1-7-10
元赤坂ビル 9F
Tel 03-5413-7829
Fax 03-5413-7410
E-mail : yoshi-rpsj@hotmail.co.jp
発行人　大野隆司　　編集人　川村賢一

ごあいさつ

新理事長　大野隆司

今年は英国王立写真協会日本支部が設立されて１１年になります。これまで日本支部を支えてこられた歴代理事長始め、役員、会員の皆様に心から感謝申し上げます。

この度、日本支部設立以来運営にご尽力されてこられた藤井悦男様が理事長を辞任された後をうけて、私が理事長の重責を努めることになりました。浅学非才の私ですので、役員の皆様、会員の皆様のご教示とご協力を切にお願い申し上げます。

英国王立写真協会本部の会員は世界各国から写真の広い分野で活躍しているそれぞれの専門家が多数参加しておりますが、日本支部の会員はプロの写真家、素晴らしい写真を撮っておられるハイアマチュアの方々が大多数です。

私は大学で写真科学の教育・研究をしてきたもので、写真の撮影・製作には全くの素人です。日本支部に相応しい会員に理事長になっていただきたいと願っています。

今年度も支部活性化に関する素晴らしい事業が関係者のご尽力により計画され、実行されています。

写真展が新しい企画で開催されます。今までは会員のみの写真展でしたが、今回は高原監事と三宅事務局長が英国大使館、日英協会、特派員協会等に写真を出展してくださるよう呼びかけてくださいました。皆様も是非ご出展ください。

川村理事の提案で英国王立写真協会本部の写真展に日本支部としてグループ参加することになりました。日本支部の存在と活躍がアピール出来ると思っています。

豊田理事と川村理事のご尽力により、会員に対する情報の提供がホームページとニュースレターで行えるようになりました。デジタル写真に関する講習会なども開催する予定です。

本村理事より会員による英国撮影旅行が提案されました。三宅事務局長は英国滞在１０年とのことで、撮影旅行の際には良い撮影スポットをご案内してくださるとのことです。近い将来、実現することを期待しています。

このように役員の皆様のご尽力により日本支部が活性化して参りました。関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

しかし、日本支部は財政的には非常に厳しい情況です。会員数４０名弱ですので、会費のみでの運営は不可能です。

日本支部創設者で名誉会員の青木朗様、前理事長の藤井悦男様、理事の田村暉昭様始め理事および会員の皆様のご寄付と三宅事務局長始め役員の献身的なご奉仕により、支部の運営が行われています。しかし現在の財政情況では３～４年で支部の活動停止・解散になることもあり得ます。

私は微力ですが、皆様のお知恵とご支援により、皆様と共に日本支部の存続および発展に努めたいと思っています。どうぞよろしくご協力くださいますようお願い申し上げます。

ＲＰＳ国際写真展へグループ参加

７月、歴史と権威あるＲＰＳ写真展に、支部としてグループ参加しました。支部の新たな活動のひとつとして、また日本支部の存在感を本部にアピールし、本部とのつながりを確かめるものともなります。

夏の写真展は、これまで「国際スライド写真展」として長い歴史がありますが、これまでのスライドによる一般部門と自然部門に加え、今年からデジタル部門が新設され、「国際投影イメージ写真展」となりました。

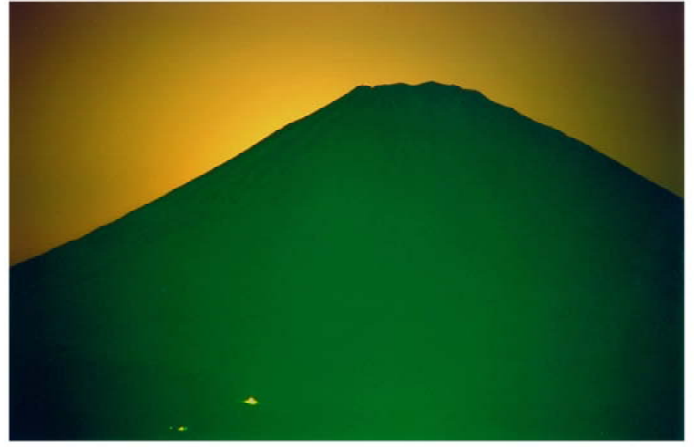
デジタル愛好家にとっても参加しやすくなったと思います。

６月の支部総会後の懇親会にて、応募作品の一部を紹介するイベントを行い、７月１８日に支部としてとりまとめ、英国に向け発送しました。

今回は、応募方法その他手探り状態でしたが、最終的に９名の参加があり、３部門それぞれに個性的な作品３０数点が集まりました。

英国の写真観は、日本とは必ずしも同じではないので、なかなか難しいものがありますが、いずれにせよ審査結果の発表が待たれます。

次回の応募は、来年３月頃の「国際プリント写真展」になると思いますので、また皆さんで盛り上げていきたいと思います。ふるってご参加下さい。

（広報 川村）

五彩富士山

乙女峠から富士山を見て

田中宏明

形あるものはいずれ滅びると言われますが、偉大な富士山も例外ではなく、滅びの世界と言われます。

しかし、人間の世界では、成長という場合もあり、日々新たな姿を見せる富士山は、人生そのものであり、その魅力にひかれて、つい、乙女峠に向かう。

■撮影しながら感じたこと。

●青い富士は、夜空の富士山が多く、闇がすべてを包み込み、新しい夜明けが来る。

●赤い富士山は、森羅万象の活動力（エネルギー）が一体化して富士山の頂上に集結し、真っ赤に染まるその様は、今この山を見たすべての万物に、その力を与えんと言わんばかりの様相であり、赤富士は縁起がよいと言われる語源ではなかろうか。（雪のない時赤くなるのが赤富士で、雪があるときは紅富士と言われる。）赤富士は、縁起のよい富士山の横綱。

●黄色い富士山は、落ち着きのなかに温かさが心地よくなり福を呼べそうな富士山。

○白い富士山は、辛い過去を富士山の雪が包み込み、頑張れば春が来て雪解けの時に流してくれる。

●黒い富士山は、大地の活動力の魂を感じる太陽と一体化したとき、今日はどのような雄姿を見せるか分からないが、人生波乱ばかり、出かける前に一度見つめて力を得るのもよいかな。

●紫の富士山は、現在の自分の品位を高めてくれる最高の色といえる。

●月のある富士山は、宇宙力学によって演じられる五彩自然の様を時の切り取りで表される富士山美の世界。

■撮影機材

カメラ：ペンタックスＳＰ
レンズ：単焦点２００ mm、４００ mm
フィルム：ベルビア５０

〈ひとこと〉

今回寄稿して頂いた田中会員の写真は、微妙な色調やグラデーションによる組写真です。できる限り原版のイメージを再現したいと、６０枚あまりの試し刷りをして画像調整を試みましたが、１００％再現することはできませんでした。
現在のデジタルフォーマットの限界ではないかと、改めて思いましたが、デジタルに詳しい方に是非対処法を教えて頂ければと思います。（川村）

■新入会員の紹介

◎川村典子（かわむらのりこ）

写真歴１０年余。
ソーシャルサイト「ミクシー」にて写真と詩の組作品を発表。
気と心をテーマに森の写真を撮り続ける。
気功／呼吸法、タオ指圧を通し、ＮＰＯユニの活動に参加。
現在、夫賢一（ARPS）とともに２人展企画中。

photo：N.Kawamura （高尾山）

「第６回 ＲＰＳＪ写真展」のお知らせ

日 時 ：２００８年２月１４日（木）～２０日（水）
１０：３０AM～１８：３０PM
１１：００AM～１７：００PM（土）（日休館）

場 所 ：フォトギャラリー「キタムラ」
東京都新宿区新宿１－２－６
御苑花忠ビル１階 03-3341-7577

テーマ：「日本らしさ／ Japanese Style」
～日本見たまま、感じたまま～
生活感、日本文化、伝統など自分の視点で自由に。

作 品 ：半切サイズ １～２点／人
（それぞれに作品タイトル。）
フィルム／デジタルいずれも可。

締 切 ：２００７年１２月２０日

問い合わせ：高原 直哉 044-854-6757

＊今回は、英国大使館、外国特派員協会などにも参加を呼びかけており、よりＲＰＳらしい写真展になるものと期待しています。ふるってご参加下さい。

応募要領など詳細については、追ってお知らせします。

放談・デジタル アナログ

構成：豊田芳州

〔３〕

司会：写真と撮影にはいろいろな分野があります。皆さんそれぞれの分野の体験を話してください。

Ｆさん：私の現役時代の話ですが、リバーサルフィルムのユーザーは、アマチュアが3割、プロが3割、医療関係で3割ぐらいの割合で使われていました。

医療関係は、特に35ミリリバーサルが多いのですが、色の標準に対しては非常に厳しかったですね。いちばんはっきりしていることは、例えば、歯ぐきをストロボで撮り、仕上がりが被写体と違っているとフィルムは買ってもらえません。

医者は開発の背景や製品に対する知識はないので、結果だけで判定します。そういうとき、他社の製品の特徴や評価を持ち出し、厳しく指摘されました。

また、博物館の標本の写真では、忠実な色が求められるので、新製品を売り込みにいっても、派手な指向のフィルムは受け入れてもらえません。医療分野の肌色のように、はっきり比較できる被写体に対しては派手な発色のフィルムは売れません。

全体の3割ぐらいではありますが、フィルムとして被写体に忠実な再現を重視する分野があるので、それを軽く見ることはできません。

リバーサルフィルムには、医療・科学的分野があり、プロのコマーシャル分野があり、アマチュアの風景写真にも使われるので、限られた品種のフィルムで対応するのはたいへんでした。

それぞれの分野にプリファード･カラー（好ましい色）があり、標準は一つではないという印象です。

Ｄさん：アドアマや業界のリーダーの方々は、写真を“強調”する方向でリードしてきたと思います。

私はラボ・サイドから見てそういう傾向を感じます。

感材（フィルム）メーカーも、それに合わせて指向してきたと思います。調子再現で良いとされているもの（ネガフィルム）に対して、“ねむい”“はっきりしない”という評価になり、作品としてアピールするものは、メリハリのついたものでなければならないということになってきた。

プロもアドアマもそういう感覚でリバーサルをもてはやすようになった。

しかし、なかにはネガ（フィルム）→ポジ（プリント）でなければならないというユーザーもいます。ネガのほうがディテールが出る、特に人物写真や、シャドー部を重視する人はネガ→ポジのほうを好んで使う傾向がある。

調子再現が得意のネガ（→ポジ）からメリハリ強調のリバーサルへの移り変わりには、時代相に合わせた業界のコンセンサスがあったのではないか。

Ｇさんにうかがいたいのですが、色の再現をどのような方向で考えられていらっしゃるのでしょうか

Ｇさん：私はカメラを買うほうが好きで、あまり質問には答えられないのですが、最近、Ｄ200に凝っているんです。

取扱説明書を読むんですが、いくら読んでも覚えきれないんです。

私はパンフレットを作って会員さんに配る場合が多いので、例えば、料理を撮ってもデジカメだとすぐ結果を見られることと、ホワイトバランスの設定がありますので、一度撮ってだめだったらフラッシュをたいてみたり、ホワイトバランスを調節ができるのがいいですね。いろいろ調節して撮って、器と料理の色がなるべく近い写真を選べるのがいい。それに、すぐ消せるのがいい。

今までは、撮った後、カメラ屋さんにまかせてそれっきりでした。もちろんよく撮れていたので、フィルム（アナログ）のほうが心配はなかったのですが、今のほうが楽しみもあり、やればやるほど深くておもしろい。

毎日夕方になると仕事をほっぽってカメラをいじり、取説を読んでいます。すると家内に「また、お父さんカメラ買ったんですか」と冷やかされます。

ホワイトバランスがすごいなというのが最近の印象です。ただ、結婚式の撮影で大失敗したんですが、買ったばかりのＤ200にいつの間にかほこりが入っていて、すべての写真の同じ部分にほこりが写っていました。レンズ交換をするときは注意しなければならないということがわかりました。

今のところデジカメに凝っておりまして、新しいカメラを買うと前のカメラは孫たちにやってしまうので、孫たちは、私がカメラを買うことを楽しみにしています。

司会：Ｃさん補足がありますか。

Ｃさん：色の基準ということでいえば、色相の再現だけが問題になります。

色には色相と彩度、明度いう三つの属性があります。そのなかで色相再現はもっとも重要です。赤が黄色くなってはいけないということです。どのカラーフィルムも色の主波長（色相を表す数値）だけは守られている。

そこで、第4の感光層、第5の、第6の感光層が研究開発され、色相再現の精度を高めようとしています。

明度は諧調と関係していて、コントラストの問題です。

彩度は、色素がだんだんピュアーになり、最近は、写真が明るくて鮮鋭になってきた。すなわち、唯一基準と言えるのは色相です。

カラーフィルムで第4の感光層を作るきっかけになったのは、紫や茶色の僧衣（色相）をいかに再現するかだった。

Ｆさん：着物、織物などです。

Ｅさん：その色をデジタルでいじるのはたいへん難しい。いじりすぎると派手になりすぎる。その調節が難しい。

Ｄさん：Ｈさんにうかがいたい。プリントするときに、染料インクと顔料インクとどういう違いがあるんですか。

Ｈさん：昔は、染料のほうがきめ細かい印刷ができ、顔料のほうがプリント後の退色がないと言われていました。

今、プリンターの開発はデジタルカメラ以上に進んでいて、1年たつとまるっきり違ったものになっている。

最近は、染料のインクでも退色があまりないが、私は、顔料のほうがこくのある色が出るような気がして、それを使っています。

キヤノンは染料をおおく扱っているし、エプソンは顔料を攻めているし、どちらともいえないが、私は顔料インクが好きです。

ただし、プリントするデータがそういうデータであることが欠かせません。

（次号に続く）

（内容は2006年6月現在です）

（編集後記）　本文記事とは別に紙面編集用として写真を募集します。ぜひ作品をお寄せ下さい。　（川村）